「あらぁ、鳴海さん。珍しいわねぇ、こんなお天道様が高い時にお出かけになるなんて」

銀楼閣を一歩出た所で、近所のおしゃべりおばさんにあっさりと捕まってしまった。

失敗ったな、とは思うが煙草の在庫を完全に切らしていた事に気づかなかった上にそれに耐え切れず出て来てしまったのだから致し方あるまい。何処ぞへ出かけていてはくれまいかと願っていたのだが、それもまた儚い夢と消えたようだ。内心嘆息をつきながらそれでも顔には何時もの笑みを浮かべ、軽く帽子を手で押さえながら会釈する。と、お気に召したのかあらあらと口走りながらこちらへ駆け寄ってきた。

「走らないでも大丈夫ですよ、俺は逃げたりしませんから」

「そんなこと言ったっておばちゃんは騙されやしないよ鳴海さん。あんた結構すばしっこいんだから」

「これでも一応探偵ですので」

「いっつもライドウちゃんにばかり働かせてるだけのくせに、よくもまぁそんな事を言えたものだこと」

放っておくと延々続きそうな話の気配に鼻白む。彼女は確かに悪い人間ではないのだが、よくよく人に干渉したり詮索したがるのが難点、といったところか。尤も、こうまで張り切るのは久方振りに自分を捕まえることが出来たが故かもしれない。ならば仕方ないかと肩を竦め、降参、といった風に軽く両手を掲げると途端に嬉しそうな顔で此処最近の出来事について話し始めた。

家族のこと。贔屓にしている酒屋の味噌が値上がりしたこと。近所の何某が事業に失敗したこと。別の者は成功して銀座に事務所をこさえたこと。頷きと驚き、疑問を適所に挟んでやると益々彼女は上機嫌で話を続けた。

しかしそろそろ開放してくれやしないだろうか、と思い始めたその時、彼女の口から再び助手の名前が飛び出

てきた。
「あらあらそういえば鳴海さん、お宅のところのライドウちゃん。あれからあの子とはどうなったの、」
「は、どう、とは、」
「あらイヤだよ惚けちゃってさァ、おばちゃんの目を誤魔化そうったってそうはいかないよ」
「はぁ、まぁそんなつもりは毛頭ありませんが」
本当に意味が分からず首を傾げていると、彼女は驚いたように丸っこい目を更に丸めて口を開いた。
「あれまぁ、知らないのかい鳴海さん。駄目だよ、あんたあの子の保護者なんだからさァ」
「済みません」
「あの子ってのはね、ほら、一時ここいらで噂になった太道寺家のお嬢さんのことだよ、」
途端に声を潜めた彼女に合わせてこちらも息を潜めて先を促す。
「朝早くの丑込め返り橋の真ん中でしっとり抱き合っていたそうじゃないか。なんとまぁ絵に描きたいほどお似合いの二人だけど、あっちはいいとこのお嬢さんだしねぇ。おばちゃんも応援してたんだけど最近めっきり噂を聞かなくなって。何か難しいことにでもなってるのじゃないかしら」
「・・・・そうなのですか、」
「そうだよ、きっとそうだよ。そんなことも知らなかったのかい、探偵の名が泣くよ、」
「返すお言葉もございません」
だって知りようがない。そもそもそんなことは有り得ない。何故なら少年は既に。そんな自分を放っておいて彼女の話はまだまだ続く。

「まぁねぇ・・・・下手に駆け落ちされるとどうしようもないしね。彼処とは縁がなかったと思ってすっぱり諦めてくれるとおばちゃんも心配の種が少しは減るんだけど」

そう呟いた後、ぎろりと見据えた視線の思わぬ迫力に後ずさりする自分を彼女はがしりと捕まえ話を仕掛けてきた。

「で、どうなんだい。・・・・ライドウちゃんの恋の行方は。駄目になっちまったのかい、それとも、」

「ああ、待った、待った。待ってください俺はそういったことには、」

「・・・・嗚呼、やっぱりそう。そうなんだね、・・・はぁ、ライドウちゃん可哀相に。落ち込まなきゃいいけど」

「あの・・・・、」

「はぁーでも傷心のライドウちゃんが変なのにひっかかったりしたらって思うとおばちゃん心配で夜も眠れないよ。なんてったって純情な美少年なんですもの。引く手数多だと思うわぁ」

いい年をしたおっさんのくせに純情な少年を引っ掛けてしまって申し訳ありません。

些かどころでなく居心地の悪さを感じ、心配げな風を装って話をあわせる。

「・・・・そうですねぇ」

「俺も心配なんですよ」

「早くあいつに、しっかりとした可愛い恋人が出来ると安心だし嬉しいんですけどね」

すぅと、視界に黒い影が走った。

はっとその色を辿れば、其処にはやはり少年の影。

能面のようなその面に、先程の発言が聞かれてしまったのだということが容易く知れた。

・・・・しまった。

様子のおかしい自分に漸く気づいたのか、彼女は訝しげな顔をしながら目線を辿り少年の姿を目にした。

あらまぁ、と驚きの声を発する彼女を置き去りにして、無言で銀楼閣のドアを潜った少年の後を追い自らもまた其処へ身を滑らせた。

「ライドウ、」

声をかけても振り向かず、黒衣を翻しながら階段を上っていく少年の頑なな態度にため息が漏れる。

嗚呼、なんでこうなっちまうんだ。

今日は本当にツイてない。だがぼやいている暇はない。今のは明らかに自分が悪い。いくら世間話に合わせる為とはいえ自らの歴とした情人である少年に対し不用意な言動を放ち傷つけてしまったのだ。なんとしてでも謝

罪せねばなるまい。
自分が呼んでいることなど百も承知の上で敢えて振り返りもせず無言で自室に入ろうとする少年を漸く捕らえた。
「ライドウ、済まん、お前が聞いてるとは思わなかったんだ」
「聞いていなければよかったのですか」
即座に切り返してくる冷たい口調とその態度に、少年が本気で腹を立てていることを知る。
「いや、そういう意味じゃなくてだな」
「どういう意味です」
「・・・・もう少し言い方があったんじゃないかと思っているという話だ」
「・・・」
納得できない、という風に固く口元を結ぶ少年を見詰め、許しを請う。
「そう目くじらを立てないでくれよ、俺のことが厭になったか」
「そう返すのは卑怯ですよ」
初めてこちらを振り向き、ひらりと黒マントを翻しながら少年は呟いた。
「・・・・しかも陳腐だ」
その若さ溢るる返事に肩を落とす。
「・・・・お前は若いからまだ分らないだけだよ」
目線を上げ、少年と合わせる。

「人間本気で追い詰められたときには陳腐な言い回ししか頭に浮かんでこないものだ」
俺だって例外じゃないさ。
しばしの沈黙の後、少年が徐に口を開いた。
「追い詰める、俺が、貴方を、」
「そうだ、この状況をそう評さずとして何とする」
再び周囲に沈黙が満ちる。自分はといえば相も変わらず少年の腕を捕らえたまま、木偶の坊のように立ち尽くし途方にくれた。たかがこれしきのことで心を揺らすな、とかつての自分であれば嘲笑したであろう少年の若さが、今の自分にはひどく眩しく、且つ自分と少年の年齢差を何より指し示している気がして遣る瀬無かった。
嗚呼、自分は確かに彼を好いているのだな、とおかしな感心が焦りと同時に胸に満ちる。ずっと黙りこくっていた少年は全身に込めていた力を抜き、ゆるく首を振り溜息をつきながらきりりと吊り上げていた目尻を元に戻した。
それを見て彼の腕を掴んでいた手から力を抜くと、少年はゆったりと羽根を広げるように長いその両腕を広げた。無言で促されるがまま歩み寄り自分より少し背の低い少年の腕の中へ身を投じる。肩に額を預け与えられた許しに安堵の溜息をつくと少年は再び仕方ないといった響きの溜息をついた。そう、許され続けているのは何時だって自分なのだ。
「・・・・何も俺だって、何時もあんな戯れ事に心を揺らす訳ではありません」
・・・・他ならぬ貴方の口から出た言葉だからこそ。
「いくら世間話のついでとはいえ、あのような事を口にするのは止めてください」

その科白と共に身体に回された少年の腕に力が加わる。頷き、謝罪と親しみの意を込めて身を摺り寄せると、正面を向いていた彼の顔がこちらへ向けられたのを感じた。その高い鼻筋で耳元の髪を少しだけ掻き分け、僅かに覗いた耳朶に舌を這わせられた。思わずぴくりと身体を揺らすとその反応に気を良くした少年は少しだけ笑いながら更にその身を寄せ口付けを落とす。堪らなくなって身を捩ると逃さぬとばかりに腰を捉えられた。

かつての不慣れ振りが幻であるかのように、たかが数えるほどの行為ですっかりとコツを掴んでしまった優秀な少年の挙動にこのまま行けばこいつどうなっちまうンだろうと先程とは別の意味で焦る。ただ巻かれているだけだった方の腕も何時の間にやら自分の背中を戯れるように動き、時折脇腹を掠めては揺れる自分の身体を楽しんでいるようだった。

普段の自分の行動をすっかりと棚に上げ、他人で遊ぶなと抗議の言葉を発しようと少年の肩から顔を上げれば、鼻先が触れんばかりに少年の白皙の顔が間近にあった。思わず息をつめると少年は口の端に笑みを浮かべゆっくりと瞼を落とした。その長い睫に誘われるように調子を合わせて目を伏せ、吸い寄せられるように唇を合わせる。小鳥が啄ばむ様に二、三度その柔らかさと弾力を確かめた後、同時に口を開き一気に深く交じり合う。絡み、吸い付き、歯の裏や上顎を撫ぜられ身体が痺れる。ふるりと震えた身体を腰に回された腕が更に密着させる。与えられる快感に思わず反応しかけている自分を自覚するが身を離そうにも少年がそれを許す気配は微塵も感じられない。嗚呼。しかも聡い少年は既にそれに気づいてしまったらしく、つい先程まで背で遊ばせていた腕を移動させ腰から下の届く範囲でではあるがゆるゆると愛撫の動きに変化させた。

堪らず合わせていた口を離し乱れ始めた呼吸を整えると、その様子を見ていた少年はクスリと笑みを零し囁海、と囁いてきた。

「・・・・ベッドへ行きますか、」

意思を委ねるその言い方に腹立たしさを覚えるが、このまま止められると男として辛すぎるのもまた事実で。しぶしぶ頷くとぎゅうと抱きしめられた後身を離し自室の方向へと促された。はぁ、と溜息をつきながら歩を進めると少年がすぅと自分の斜め背後に近寄り歩み出す。直接触れてはいないようだが腰付近に回された腕の気配に思わず天を仰ぐ。

おいおい、お前分かってンのか。その体勢は《エスコート》って言うんだぜ。

多分、いや確実に分かってはいないのだろう少年の天然過ぎる行動に頭痛を覚える。出会った当初から変わらないその性分に呆れるやらおかしいやら嬉しいやら。くくく、と笑みを零すと何が可笑しいのです、と訊かれたがゆるく首を振ることで問いを躱す。

しょげ返っていたのが嘘であるかのような自分の姿と問うたことを躱されたのが気に食わないのか、拗ねてしまった少年の気配を背後に感じながら自室の扉を開け、帽子を外してひっかけると、少年が無言で上着を脱ぐのを手伝い始めた。有難く甘えながら上着を脱ぎ、少年へ向き直れば彼はそれを皺にならないよう丁寧にハンガーに吊り下げていた。

その姿にはるか以前にあの任侠と交わした会話を思い出し、可笑しさがこみ上げた。そんな自分の表情を見て眉宇を顰める少年に首を振りながら今度は黒いマントの間から手を入れ、白いベルト部分を外す。正面で溜息をつきながら少年がマントを脱ぐのと同時に数箇所に分かれているベルト部分をすべて外し終えると慣れた手つきで少年が仕事道具を近場のデスクへ丁寧に置いた。さぁ、これからは何時もの手順だ。学帽を奪い取り己が帽子の隣に引っ掛けると少年は慣れた手つきで髪をかき上げ向き直った自分を捕らえて口付けを交わした。するりす

るりと互いの衣装を竟げ時折さまざまな箇所に唇を落とす。下衣まで剥ぎ取れば後はもうベッドに横たわればいい。すっかり反応しきっている互いに急かされるように褥で戯れる。心地よい感覚に身を委ね、初めて肌を重ねてから数度に渡る経験ですっかり成長を遂げた少年の手管に酔いしれる。時折首筋だの胸元だの下腹部などを掠める少年の長い前髪がひどくくすぐったかった。自分を咥えようとする少年を引き上げ、不満そうな表情に愛しさを感じ引き寄せて口付けを強請ると、お望みのままに、と呟きながらその薄い唇を合わせてきた。舌を絡ませあいながら両腕でしなやかなその身体を抱き締めると少年は一瞬硬直した後喰らいつくようなそれへと変え両脚の間に割り込ませた己の腰を擦り付けて来た。其処から生み出される快感に堪らず喉の奥から嬌声が漏れ出でる。息苦しくなって降参と軽く少年の背を叩き唇を開放してもらうが、それでも止まない腰の動きと新たに加わった手を使った愛撫に声が止まらない。こんな所まで優秀だとは全く以って恐れ入る。幾度思ったことか分からぬことを改めて思い知らされながら酔っていると、少年は慣れた手つきでベッドサイドに常時（常時だ、）備え付けてあるそれへ手を伸ばし掬い取る。

それを実際に手にとって驚きを示したのは左程遠い昔の事ではない筈なのに、すっかり馴染んでしまった程頻繁に肌を重ねているのかと思えばらしくもなく照れを覚えるが、如何せんあちらは十代の後半。情人と邪魔の入らぬ二人暮らしでおまけに月のものが訪れてしまう女とは異なり何の影響も受けない男同士とあらば考慮すべきは体力差ただ一点のみ、とくればそりゃあ馴染みもするだろう。おまけに相乃の自分はといえば快楽に身を委ねるのに左程抵抗を覚えない性質だ。誘わるるがまま床を共にすることも珍しいことではない。

・・・・尤も。

ゆっくりと差し入れられる指に息を詰めながら考える。

・・・・未だ身体を完全に繋げたことはないのだが。

だがそれは何も目分だけの所為ではない。通常であればいくらなんでももう遂げている筈なのだ。全ての原因はその姿形にそぐわぬ少年のそれにある。自分の所為ではない。寧ろものすごく頑張っているのだ責められる謂れは全くない、等と指が増える感覚から気を逸らせる為に徒然と思考を泳がせる。そのほっそりとした外見からは想像し難いが銃のみでなく長さ二尺もある打刀を振るう為か少年の手は意外とがっしりとしていて節くれ立っている。数本入ると流石に慣れるまでに時間がかかったが、内部で蠢いていたそれがある一点に触れた時びくりと身体が跳ねた。相変わらずなその反応に少年が愛おしそうに口元へ唇を落とし片膝にかけていた空いた方の手を胸元へ伸ばし愛撫を加える。与えられる快楽に腰を揺らめかせ随分とほぐれてきた自分の其処へと意識を滑らせた。

初めて肌を重ねたあの日から幾度も努力した結果、男の身体といえども何とかなりそうだと思える位までは慣れてきた。未だ多少の痛みは走るが流血沙汰になったことはないし何より、何時までも途中で止めさせられる少年に対し情人としてのそれだけではなく同じ男としてその辛さも理解しており申し訳なさも感じていた。先日は惜しい所まで耐えられたのだ、今日こそはいけるかもしれない、と期待のようなものが胸中を飛来する。

程よくほぐれたのが少年にも分かったのか、振らせ続けていた細やかなキスを中断しすっと身を起こし体勢を整えた。抵抗の意を示さずただ受け入れやすいように身体を調整すると、少年が徐に上体を屈め腹部にキスを落とした。その行為に不覚にも胸が熱くなる。ゆっくりと押し入ってくるその質量に息が詰まりそうになるが呼吸をすることで身体の力を抜き少年へ行為の先を促す。そのままゆるり、ゆるりと身を進める少年に調子を合わせ次第に増えていく少年の存在に身体は異物感を訴えるが心は震えていく。ひたすら耐えていると、それがある一

点を越えるのが分かった。入った。
其処さえ乗り越えてしまえば後はもう大丈夫な筈、と経験上から割り出した予想通りに、少年の腰はゆったりと押し進み自分はといえば僅かばかりの痛みと経験したことのない程の圧迫感にはっはっはっと断続的に呼吸をしながら最後まで収まりきるまで力を抜き続けた。
「・・・・はぁっ、」
完全に収めてしまった後、少年は堪らぬと言う様に目を閉じ頬を染め溜息をついた。その色っぽさに胸が熱くなり、圧迫感を堪え何時の間にやらゆるく握り締めていたシーツから引き剥がし、鮮やかに染まった少年の頬に指を伸ばした。そっと触れた自分の手の平に頬を押し付けるようにして握り締めキスを落とした後少年は上体を更に屈め今度は唇に重ねた。かるく舌を絡ませた後こちらの呼吸を慮ってかしつこく吸い付くようなことはせず、そのままぎゅうと全身を握り締める。
「・・・・熱くて、心地いい・・・・」
うっとりと酔ったように呟く少年の言葉に赤面する。どうやらあらぬ箇所が同時に締まったらしく少年がぴくりと身じろぎした。困ったようにこちらを見詰めてくるその眼差しに、嗚呼動きたいのだなと理解する。
「・・・・ゆっくり、なら、・・・・はぁ、・・・・大丈夫だ」
「すみません」
申し訳なさそうに謝罪の言葉を口にしながらも、少年は指示通りゆるゆると腰を動かす。耐える為か時折動きを止め、呼吸を整えながらも執拗に何かを探しているようだった。
こいつめ、生意気と言おうか健気と言おうか。

何かも何も、こんな状況で男が探すものといったらあれしかないだろう。指でしかまだ其処に触れたことのない少年には此処か探し出すのに苦労するだろうことは目に見えている。自らの快楽だけではなくこちらのことを常に気遣う少年の心意気に免じてやるかと思いながら少年の腰に足を絡めると、驚いたのか少年の腰の動きが止まった。

「・・・・な、鳴海、」

「・・・・・はぁ・・・・・いいから、動くなよ。抜かないよう気をつけろ」

指示通りにする少年を満足げに見やりながら腰の位置を調整する。じりじりと動かしているとある場所を掠め、身体が打ち震えると共に思わず嬌声が漏れた。同時に締め付けてしまったらしく少年がうっと呼吸を詰める。しかし目線はこちらへと据えたまま口を開いた。

「・・・・分かりました」

失礼します、と呟き腰を抱え、ゆっくりと動き始める。堪らず嬌声が漏れ出で続け、自然加わる力に少年が硬くなる。ぱたぱたと汗が流れ室内には少年の荒い呼吸音と自らの嬌声、そして濡れた音。

しばしの間漸く手にすることの出来たその全てに互いに酔っていたが、限界が来たのか少年が荒い呼吸の狭間に鳴海、と声をかけてきた。

小さく頷いてやると少年は片手を自分のそれへ絡みつかせ、もう一方の腕で自分の腰を半ば固定した。先程よりも動きを早め腰を打ち付けてくる。其処から生じる快楽に唯ひたすら身を任せながら感覚と呼吸、少年の様子によってそろそろか、と思ったその時、少年がふるり、と全身を震わせると同時に熱いものを感じ、自らもまた一際強まった快感に気をやってしまった。

ぐったりと身を投げ出していると逸早く回復した少年が身を起こし口付けてきた。そのまま擦り寄るように身を寄せられ、子犬のようなその様子にかわいいとは思うがそれよりも先ず言いたいことがあった。
「・・・・ライドウ、」
「なんですか、」
「・・・・さっさと抜いてくれないかな、」
お兄さんちょっと身動き取れないんだけど。
「厭です。もう少し居させてください」
暖かくって気持ちいい。
そう言って益々擦り寄る少年に更に抗議する。
「そりゃお前はそれでいいかも知れねェけどさ、俺はさっきから落ち着かねェの・・・・って、おい、」
気が抜けた筈の中の少年のものが再び自分の中で気を溜め始めたのが分かった。こっちは少年とは違い三十路を越えているのだ。はっきり言って次まで耐えられるかどうか。
泡を食ったような自分の反応を目にし、クスリと笑いながら少年は腰を動かし始める。先程の言葉通りすっかり覚えてしまった其処を集中的に責めてこられては堪らない。息が上がり再び嬌声が漏れる。今度は余裕が生ま

れたのか、様々な箇所に手を伸ばし愛撫を加えながら少年が顔を近づけぺろりと口唇を舐め、謳うように呟いた。
「明日はベッドから出なくても構いませんから」
俺が全て、御奉仕させて頂きますので。
「・・・・どうぞお付き合いくださいませんか」
「・・・・終わったら先ず風呂に連れてけよ」
後始末だってあるンだからな。
いよいよ反応を返し始めた自分の身体に見切りをつけ、諦めたように承諾の意も込めた返事を返すと勿論です、と嬉しそうに頷かれた。
顔や挙動はそんなにかわいらしいのに、なんだってこっちは可愛げがないのかね。
そう遠くはない未来にはすっかり翻弄されてしまうであろう事が容易に推察できるその存在に嬉しいやら悲しいやら。だが今の自分にはこの少年と初めて遂げることの出来た事実は間違いなく幸福であって、技量云々等は関係なしに感じてしまったのは初めてであった。肌を重ねたのはこれが初めてではないが、繋がったのは初めてである。

嗚呼、この行為はこんなにも素晴らしい感覚をもたらすものだったのか。

そう思うと何故だか切ないような、悲しいような感慨が湧き上がってきた。
だがそんな感慨を今面に出しては少年が誤解する。ぐっと堪えて与えられ続ける感覚のみを追い、少年を抱き

しめ、彼の望むがまま身を委ねた。